

## 「私が酪農を選んだ理由と、私の将来」

愛媛県立農業大学校  
総合農学科 2年 徳田 愛理

私は小学生のころ、いじめられていました。

今考えるとしょうもないイタズラやいじわるなのですが、当時の私からしてみるとそれはありとあらゆる人間が悪意の固まりにしか見えなくなるぐらいの恐怖でした。親や先生に相談することもできず、学校をどうやって休むか悩みながら嫌々学校へ向かう毎日でした。

そんな私を救ってくれたのは動物でした。都会から田舎へ転校したとき、私の友達はありとあらゆる生き物でした。長い蟻の行列に金平糖を与え、道端のカエルを田んぼに逃がし、アメンボを眺め、蝉の声に驚き、そして野良猫と共に我が家に帰る…そんな日々を送っていました。そのうちに、都会から来たのに虫を怖がらない私にクラスメイトは心を開いてくれました。私が今こうして他人に怯えずコミュニケーションがとれるようになったのは全て、動物のおかげです。私は中学生時にはそう考え、自然や動植物に親しみと感謝の気持ちを持つようになりまし。そのため将来は動物関係の職に就こうと決心しました。

そして私は愛媛大学農学部附属農業高等学校に進学しました。そこで、農業という素晴らしい仕事について学びました。野菜、果樹、作物、植物バイオテクノロジー、環境問題、そして畜産。今までに経験したことのない内容でしたが、元々自然が好きな私はどんな作業も平気でした。ミカンの剪定中に蜘蛛の巣に引っ掛かろうが鶏舎の除糞作業で汚れようが気になりません。むしろその環境に喜びを感じていました。

私は確信しました。「私が生きる糧とするべき職業は農業だ!」と。

そして冒頭でも述べた通り、動物を特に好んだ私は愛媛県立農業大学校の畜産コースに進学しました。私は豚や和牛も好きなのですが最終的に選んだのは酪農でした。酪農でもっとも好きなのはやはり“搾乳”です。酪農はブラッシングや餌やり以外にこの“搾乳”による、牛とのコミュニケーションがあります。これにより、牛一頭一頭の性格や個性を把握できます。人が近付くと搾乳を覚悟しているのかそっと横に避けてくれる牛、ミルクを蹴落とす器用な牛、配合飼料に夢中で搾乳されていることに気が付かない牛、私の髪の毛を餌だと思ってしゃぶる牛…搾乳という一つの仕事で様々な仕草や性格が分かります。そして何より楽しいのが、初めは搾乳を嫌がっていた牛が徐々に私のことを覚えてくれて、大人しく搾らせてくれるようになることです。初めは「誰だこいつ?」と言いたげな態度を取っていた牛が心を開いてくれたのが分かります。また逆に、こちらが搾乳中の様子や前搾りでの乳の様子などで「今日は様子を変だな」と牛のことが分かるようになります。中には最後まで抵抗したり人を選んだりする牛もいますが、うまくこちらがコントロール出来ればどうにかかります。努力次第で牛と人との関係はうまくいくのです。

---

私はいじめられていたとき、どうにかしようと足掻きました。悪口を言われても反論したり、一人だけ離れた席での食事に耐えたりしました。でも状況は改善されませんでした。孤独による恐怖と悲しみに包まれた毎日を送っていました。でも今は違います。懸命に学び、働き、触れ合えば、少しずつですが牛は私に懐いてくれます。“触れ合い”と“信頼”と“安らぎ”を求めていた私はそんな彼らに心を打たれました。そして救われたのです。私はもう寂しい想いや孤独に耐えることはないのだ、と。

ですがそのためには絶えず努力をしなければなりません。何故なら畜産は仕事です。働き、利益を上げ、収入になってこそ継続できます。また農家さんも企業と同じで使えない人間は雇ってくれません。私は今までよく、「女の子にはしんどい仕事だから、止めておきな。」「君はもっと接客業とか、サービス業が向いてそうなのはどうして酪農なんか?」「動物が好き、可愛いだけでは務まらない。」などの言葉を投げ付けられました。私は女であるうえに小柄です。身長は150センチしかありません。ホルスタインは私よりも大きい子が多く、中には台に上らなければ直腸検査すら難しい子もいます。どうにか手を肩まで入れても子宮の形を確かめることが精一杯で卵巣を掴むことはできない場合が多いです。また、その身長から大きな荷物を持ち上げるのが難しく餌を高く詰めません。作業をして少しずつ筋肉は付いてきました（以前は20キロの飼料さえ持ち上げられませんでした）けれど、まだまだ筋力は足りません。動物は力の弱さを察するので、気を抜くと牛を誘導する時に刃向かわれたり逃げられたりします。しかしおかげで今はどんなに牛にどつかれても怖くなくなりました。多くの人は大きな動物を可愛いと思っていても近付かないか柵越しでの触れ合いしかできません。しかし非農家出身の私がこれほどまでに牛を恐れないことは、どこの農家さんにも褒められた唯一の長所でした。それが私の強みであり私が畜産に向いていると思う部分です。こういった長所を生かし、諦めずに少しずつでも良いから体の使い方を覚え、うまく働けるように努力していこうと思っています。

現在、宮崎県では口蹄疫が流行し私たち愛媛の畜産も見えない敵の恐怖に晒されています。実習では消毒の手伝いが増えています。また、インターネットなどで現地の人々の声を見聞きするたびに胸が締め付けられる思いをします。それでも一般の方々には知られていません。実際、同い年の女友達の多くに「口蹄疫ってなんか流行ってるけど何なの?」「人には感染しないの?」と聞かれました。あれだけ報道されているのにと同時に、私も今の学校で畜産を学ばなければ、彼女たちと同じように他人事であったのだらうとも考えました。

このように、様々な問題を抱える農業、その中でも畜産は人々に間違ったイメージや情報が流れています。多くの人々は牧場に行けば暖かな日差しを浴びながらのんびり餌を食べる“牛さん、豚さん”がいるという程度にしか思っていません。事実、私もそうでした。しかし現実では“ひね”た動物は幼いころに処分され、鶏の本来の寿命は10年近いのに経済寿命で

---

---

10分の1しか生きられず、和牛はビタミンを制限され失明寸前、そして乳牛は人工授精で何度も種付けをし産めなくなれば出荷され肉になります。植物も勿論命をいただくという概念は同じなのですが、より一層リアルでグロテスクなのが畜産なのです。そういった、栄養を制限したり経営のために育成の悪い個体は淘汰したりなど、どれも授業で学んだ程度で実際の様子は分からないし想像も出来ませんでした。そのため初めて鶏を屠殺、解体したときは涙を流してしまいました。こうして畜産のグロテスクな部分も学んできましたし実際に目の当たりにもしました。農家さんから女の子には辛いしこれから儲からないから止めておけとも言われました。しかしそれでも、私の幼いころにまわりついていた他人への恐怖や孤独感、そして寂しさを消してくれた牛たちが大好きです。懸命に生きている彼らの傍で共に人生を過ごしたい、ただそれだけなのです。私はそのための努力は惜しみませんし、辛いことがあっても、例え再び理不尽ないじめに遭おうとも、毅然として戦おうと思っています。

農業は自然への畏敬の念を持ち自然と共に生きる職業です。私はこれからも自然を好きであり続けるし、また動物も愛し続けるでしょう。そのため今後は畜産関係、可能であれば観光牧場といったサービス業と食品加工と農業、三つが合体した第六次産業系の職場で働きたいと思っています。もし現場部門の担当になれなくても、日常に“乳牛”がいる環境というだけでも私からすれば幸せなことだからです。しかしなるべくは直接牛と触れ合える育成や搾乳部門で頑張りたいと思っています。そんな夢を実現するために、これからも絶え間ない努力をし続けることを、ここに誓います。

---